2018 年 5 月 11 日

愛知県立大学学術研究情報センター長
梶原克教

愛知県立大学長久手キャンパス図書館
図書館臨時展示企画

This Is America　―　分断国家の過去・現在・未来

ゴールデンウィーク最終日 5 月 6 日のことでした。論文読みに疲れひと休みしながら「研究あまり捗らなかったなぁ、明日からまた決裁印を押し続けて右腕が鍛えられるにゃ～」と遠い目をしつつスマホの画面にふと目を落とすと、にわかに SNS の TL が騒がしくなり始め、瞬く間に特定の名前と画像で埋め尽くされていきました。その原因は、Childish Gambino というミュージシャン（俳優としての名は Donald Glover）が、当日（米国東部時間 5 月 5 日夜）に発表した“This Is America”という曲の MV（ロサンゼルス在住日本人ヒロ・ムライ監督作、YouTube で視聴可能）でした。

ブラック・カルチャーを研究している私は、当然そのミュージシャン兼役者については知っていました。いや知っているどころか、彼のアルバム *Awaken, My Love!*は大好物で、車中でエンドレス･リピートし続けるほどです。しかしこの人物の MV がもたらした今回のインパクトは、私のような好事家の趣味を超えて広く社会に共有されたようです。というのも、公開からしばらくアメリカの Twitter トレンドワード 1 位から 4 位までがすべて、Childish Gambino、Donald Glover、“This Is America”関連で埋めつくされ、アメリカの人種問題ににについていささか無関心な日本においても、みんな大好き星野源さんが 5 月 8 日（7 日の深夜）のラジオ番組で「衝撃」として最初にかけた曲としても知られることになったのですから（MV の解釈については、http://fnmnl.tv/2018/05/08/52314 をご参考ください）。

上記の出来事を受け、またアメリカにおける人種問題の根深さをテーマにした映画『私はあなたのニグロではない』が 5 月 19 日から名古屋で公開されるという良いタイミングでもあるので、学生の皆さんに「アメリカのいま」を歴史的背景から理解してもらおうと今回の展示企画をおこなうことになりました。

Childish Gambino の“This Is America”は、その後数日で様々な媒体(*New York Times*, *Guardian*, *Time* などの一流紙を含む)で取り上げられ論評されることになりましたが、そのモチーフは近年アフリカ系アメリカ人ミュージシャンの多くに取り上げられてきたものです。Beyoncé の “Formation”しかり、Pharell Williams 率いる N.E.R.D.の “1000”しかりで（どちらも YouTube で視聴可能）、アメリカのポップアイコンたちは 2010 年代アメリカにおける人種問題の再浮上と銃の問題をモチーフとして、楽曲や MV であからさまに取り上げるようになったのです。

その背景には 2010 年代以降の人種問題にまつわるバックラッシュがあります。2012 年には Trayvon Martin という 17 歳の少年が、フードをかぶって歩いていたというだけで怪しまれ、警備員に射殺され（Beyoncé や N.E.R.D.の MV はフードをかぶった人物を象徴的に登場させています）、以降も類似の罪のない黒人への暴力・殺人が続きました。MV “This IS America”も、公

開直前に起きた Stephon Clark さんの事件に言及するかのようにスマホをモチーフとして用いています（Clark さんは手にしていたスマホを拳銃と間違われて警察に射殺されたのです）。

そこで本企画では、そうしたアメリカの現状をより深く理解するための書籍と映像作品を展示します。まず軸となるのは**ジェームズ・ボールドウィン**の諸作です。ボールドウィンは「何が起きようとアメリカよりはマシ」と 1948 年にアメリカを離れ、ヨーロッパに滞在します。彼の代表作**『ジョヴァンニの部屋』**はパリを舞台とし黒人はいっさい登場しませんが（代わりに白人のゲイが登場）、それは「黒人作家」という色眼鏡で見られるのを嫌悪したからでした。

1950 年代アメリカではまだ白人と黒人が同じ場所で教育を受けられる機会はほとんどありませんでした。そんななか 1956 年ノースカロライナで、ドロシー・カウンツさんが白人の学校で教育を受ける権利を求めて白人の学校に登校することになりました。暴力的妨害を白人から受けながら、罵られながら登校を続ける 15 歳の少女の勇敢な姿（映画『私はあなたのニグロではない』に登場します）をヨーロッパにいながらニュース映像で見たボールドウィンは、「激情と恥辱、嫌悪と同情」に満たされたといいます。どうして自分は、あそこで彼女のそばに寄り添って一緒に歩いてあげられなかったのかと。彼はすぐに帰国を決意し、公民権運動に関わってゆきます。以後の彼の人種問題への考察は**『次は火だ』**などの評論で読むことが可能です。**映画『私はあなたのニグロではない』**は、ボールドウィンが残した言葉をサミュエル・L・ジャクソンが読み上げる声に映像が重ねられる形をとっていますが、決していきり立ったものではなく、静謐で抑制のきいたナレーションと映像なので、ぜひ劇場に足を運んでみてください。

ボールドウィンに影響を与えた**マーティン・ルーサー・キング Jr** と**マルコム X** の書籍も厳選して一冊ずつ展示します。ご存じの通りこの二人は公民権運動における二つの極なのですが、のちのポピュラーカルチャーに与えた影響も大きく、たとえばマイノリティをミュータントという比喩で描いた『X-MEN　ファースト・ジェネレーション』では、プロフェッサーX＝キング Jr、マグニート＝マルコム X という図式が明白です。二人を含む黒人の人権運動に関わった人物たちとその思想を深く知るには、現在のアメリカに於ける最大の知性の一人**『コーネル・ウェストが語るブラック・アメリカ』**がお勧めです。

ジェームズ・ボールドウィン死後の知的空白を埋めたといわれるタナハシ・コーツの**『世界と僕のあいだに』**は、15 歳の甥に語りかけるボールドウィンのスタイルに倣い、父が 14 歳の息子に現代アメリカ社会の矛盾を語り黒人が生き抜く術を教える形式をとっています。2015 年全米図書賞受賞の大ベストセラーです。

現在のアメリカにおける黒人のポジションを考えるには、奴隷制貿易にまで遡って考える必要があります（黒人は移民ではなく強制連行された奴隷の子孫ですのでお間違いなく）。フレデリック・ダグラスの**『アメリカの奴隷制を生きる』**は、自伝だけに奴隷制下の生の過酷さが皮膚感覚でヒリヒリと伝わってきます。最後に**『アメリカ黒人の歴史』**。これを読むと、当たり前のように思っている肌の色の分類とそれに付随する優劣の感覚が、実は所与のものというよりはむしろ「経済的」要請によって定着させられたことが歴史的に理解できます。

これを機会にぜひアメリカの歴史と社会と文化について考えてみてください！